

悲運の女総督 ベアトリス

伊藤滋子

スペインの貴族の娘ベアトリス・デ・ラ・クエバが結婚したのは 1538 年の秋のことだった。相手は、コルテスの片腕としてメキシコの征服に参加し、その後グアアテマラの征服者となったペドロ・デ・アルバラードである。19 才の花嫁に対して花婿 53 才という年令差もさることながら、彼はベアトリスの姉の夫だった男である。10 年前に結婚した姉は夫とともにグアアテマラに渡る途中で亡くなった。

金髪を振り乱しながら顔を真っ赤にして戦う大柄なアルバラードは数多い戦士の中でもよほど目立つ存在だったとみえ、トナティウー（ナワ語で太陽の意）とあだ名されて先住民から恐れられ、彼らに対する情け容赦のない振舞いでつとに有名であった。それを非難する訴えは一度ならず王室に出されたが、そのつど彼を救ったのがこの二度の結婚であった。クエバ家は有力な貴族である上、花嫁の伯父はスペイン王カルロス一世の重臣として当時宮廷内で絶大な権力を握っていた。貴族にとっても新大陸の征服者との縁組はよほど魅力的だったらしい。この時も義理の兄妹の結婚ということで、ローマ教皇の許可を要したが、国王自ら教皇に働きかけ、結婚が許されると花嫁に 1,500 ペソの祝い金を贈った。ベアトリスの持参金は 10,500 ペソとされていたが、その額には姉の持参金もしっかり勘定されてい

たのだから、貴族も結構計算が高い。この金のはちにグアアテマラで農園や屋敷の購入にあてられた。アルバラード自身は 3 隻の船、武器、火薬、大砲、道具類、食料のほか、相当な額の船材の購入に莫大な借金をした。カルロス一世との間で、7 年間という期限付きながら正式にグアアテマラの総督に任命されるのと引き換えに、香料の島、すなわちアジア諸国への航路を開拓するという契約を交わしたためである。スペインは新大陸を自国の領土としただけでは飽き足らず、アジアにまで触手を伸ばそうと、アルバラードにその事業の一端を担わせたのだった。道理で王室は人権擁護派の意見を退けて、アルバラードの先住民虐待の罪を不問にしたわけである。



この時アルバラードについてグアアテマラに渡ったのは 300 人の兵士、僧、役人などで、ベアトリスには従兄のフランシスコ・デ・ラ・クエバ、それに 20 人の貴族の娘や大勢のお付きの娘たちが従った。一行が上陸したのは中米のホンジュラスの港である。中米の総司令官であったアルバラードは自分の領地内にスペインと直接行き来できる港を持ちたいと考え、2 年前もそこから出発した。しかし一行が着いてみると港はすでに無人で、アルバラードはグアアテマラに使者を送って帰還を知らせる一方、スペイン人のいる内陸のサン・ペドロまでの道を切り開いた。結局ホンジュラスに 5 ヶ月滞在したが、この間ベアトリスは思いがけず内助の功を発揮する。そこはアルバラードの領地の一部であったが、かれの留守中にユカタンの征服者モンテホが入りこんで、統治を始めていた。両者の間には陰悪な空気が漂い、まかり間違えばスペイン人同志の戦闘が起こりかねなかったが、この事態を心配したその地の司教の仲介で、ベアトリスはモンテホの妻と友好を結び、互いの夫を諫めたのである。結局二人の征服者は話し合いのテーブルについて交渉を重ねた結果、領地の交換や金の支払いで平和裏にことを収めた。

一方、アルバラードが留守の 2 年間、東の間の平和を楽しんでいたグアアテマラの人々はかれの帰還を知ると顔を曇らせ、先住民は恐れおののいた。残酷なやり方で征服され、奴隷同様の過酷な扱いをうけてきたかれらの記憶は余りにも生々しかった。その恐れはすぐに現実のものとなる。駆りだされた先住民に課せられたのは、牛馬の代りにこき使われる厳しい運搬作業であった。船から降ろした武器、これから建設す

る船に要する碇、船道具、釘類、帆布などの材料、女たちの家具調度品など、さまざまな品を背中に担ぎ、険しい山岳地帯の道なき道を何度も往復して内陸の高地まで運ぶのである。旅なれない女たちにとってもそれは苦しい道のりであった。一行はスペインを出てほぼ 1 年後、首都のサンティアゴに到着した。

到着の翌日、アルバラードは王令を読み上げて正式にグアアテマラ総督の地位についてたことを宣言し、日夜町をあげての祝宴が始まった。そんな中でのこと、男たちが催し物に興じている片隅で娘たちがおしゃべりしていた。「本当に私たち、ここにいる男と結婚しなければならないのかしら」「老いばればかりだわ。私はまっぴらごめんよ」

「片足や片腕だったり、耳がなかったり、片目だったり、顔が傷だらけだったり、一人として満足な男などいないじゃない。まるで地獄から這い出してきたみたいなのばかり」「でもこのうちのどれかと結婚しなくては、インディオの分配に与れないのよ」

「なるべく年取ったのを選んで、死ぬのを待ってから若い男と結婚しなおせばいいわ」たまたま側を通りかかってこの会話を耳にした男が、ついにいたたまれなくなって娘たちを叱り飛ばし、男たちのところへ行ってこのことを話した。そして「けしからん女たちだ。結婚したいやつはするがいいが、自分はごめんだ。インディオの首長の娘の方がよほどいい」と言ったという。実はアルバラード自身も足に矢を受けて、びっこだった。

グアアテマラは山と湖の美しい国だ。現在の古都アンティグアの近郊にあったサンティアゴの町も富士山そっくりの山のふもとにあり、常春の風光明媚な町で、ベアト

リスはすっかり気に入った。町は築かれて12年になるが、何しろアルバラードが遠征で忙しく、ほとんどここに腰を落着けたことがないので、まだ首都の体裁はほとんど整っていない。従ってサンティアゴに戻ってきたアルバラードは多忙を極めた。カテドラルを始めとする建物や自らが住まう宮殿の建築、水道や治水工事などに加えて、太平洋岸の港ではアジアへ行くための船が建設中であった。中米やペルーからも続々と航海に参加する者が集まってきて、その人数を養うだけでも大変である。アルバラードは準備を急がせ、さまざまな女に産ませた子供5人をベアトリスに託し、慌しく最後の航海に出発していった。ベアトリスがサンティアゴに来て1年にも満たない時だった。

それから2年後、突然ベアトリスのもとにアルバラードの訃報が届く。アジアへ行くはずだったアルバラードは運命の手違いでメキシコのグアアダラハラで死んだ。戦死ならまだしも、部下の不手際で足をすべらせて斜面を落ちてきた馬の下敷きになったのだ。22才で未亡人となったベアトリスの嘆き方は尋常ではない。町全体に9日間もの服喪を命じ、自分が住んでいた宮殿の内外をすべて真っ黒に塗らせた。そして寝室に閉じこもって食べ物を拒み、眠りもせず、悲しみ嘆く声は昼夜をおかず部屋の外まで漏れ聞こえた。町の人々はその異常な悼み方になにか不吉なことが起こるのではないかと噂しはじめた。折りしも葬儀のミサが終るや激しい雨が降り始め、街路は川と化す。そして喪が明ける最後の日、彼女は自分が夫のあとを継いで総督の地位に就くと表明し、市議会もそれを承認した。貴族としての誇り、これまで立派に夫の留守

を守ってきたという自負、夫が残した莫大な負債の支払い・・・彼女のさまざまな思いから出た決断であったが、女総督の誕生という前代未聞の事態は町の人々の反発を招いたのは確かだ。その翌日書類に署名した彼女は、最初「悲運の女ドニャ・ベアトリス」と書いたが、何を思ったのか、すぐにドニャ・ベアトリスの部分線を消して「悲運の女」のみとした。

夜に入っても雨は勢を増す一方であった。さらに夜半過ぎ、火山活動による地震があつて町のすぐ後にある山の噴火口が崩れ、中に溜まっていた水が一気に流れ出し、連日の雨で地盤が緩んでいた山肌が地すべりを起こした。急を知ったベアトリスは5才になるアルバラードの娘を抱いて十数人の女たちとともに庭に造られたお御堂に避難し、十字架を胸に祈り続けた。だがその小さな建物はたちまち濁流に飲みこまれ、宮殿の中で助かったのはアルバラードの長女レオノールなど5人だけだった。スペイン人50人、先住民600人の死者を出したこの災害でサンティアゴは壊滅し、新大陸最初で最後の女総督の命は40時間で終わった。

その後市議会はベアトリスの従兄の貴族フランシスコ・デ・クエバを臨時総督に選ぶ。かれはのちにレオノールと結婚し、その家系がアルバラードの残した唯一の子孫となった。レオノールはグアアテマラで生まれたが、母はメキシコのトラスカラの首長シコテンカトゥルの娘であった。

(いとう・しげこ)